論文

質的研究法のはじまり

――マリノフスキとミードの調査方法――

塚　本　鋭　司

Abstract

This paper discusses Bronislaw Kasper Malinowski's *Argonauts of the Western Pacific* and Margaret Mead's *Coming of Age in Samoa*, both of which lay the foundation for qualitative research methods. Both Malinowski and Mead are trained cultural anthropologists. In particular, this paper pays special attention to methodologies of collecting data. Malinowski uses participant observations to delve into the infrastructure of the islands in Papua New Guinea, and he tries to hide his racial identity by participating in local events because his identity as a white western male researcher may hinder the collection of the data necessary for his research. By contrast, Mead uses her identity as a female researcher effectively to collect the data. This paper analyzes how both researchers immerse themselves into a local community to collect descriptive data in their research.

Keywords: qualitative research, ethnography, cultural anthropology

1．はじめに

質的研究法について，私が学んだのは，アメリカのニューヨーク州にあるシラキュース大学大学院博士課程に在籍していたときだった。研究法は博士号を取得するためには必修の科目で，その当時，質的研究法入門，上級質的研究法Ⅰ，上級質的研究法Ⅱと，三つの研究法が開講されていた。私は質的研究法という言葉さえ，それまで聞いたことがなく，どんな研究法なのか，何の予備知識もなかった。

それ以前に西イリノイ大学大学院で教育学を学んでいたときに受講した研究法の授業は，

量的研究法で，主に統計や偏差値を使って分析するものだった。そのような研究法を否定するつもりは全くないが，社会で起こる事象やそれに対して人々がどう感じるのか，どう考えるのかが見えてくる調査法ではなかった。また，わたし自身，量的な研究法にあまり関心が持てなかった。数字で表す調査結果は，一見客観的なようであるが，その客観性を数字が保証しているとは思えなかった。

そんな私の研究法に対してのもやもや感を払拭してくれたのが，質的研究法であった。シラキュース大学大学院で受講した質的研究法入門では，大学院生自身が調査するフィールドを決めて，そこに赴き，フィールドノートを書くのが課題だった。私は移民としてシラキュースに住んでいる人たちを対象に，英語を教えている教育機関の教室に足を運び，そこで学んでいる主にロシアからの移民と一緒に授業を受けて，その様子をフィールドノートとして書いた。6回分のフィールドノートは，合計100ページ以上になった。そのフィールドノートに大学院生の教育助手がコメントを書いたり添削をしたりして，毎回返却してくれた。上級質的研究法Ⅰでは，以前訪問した教室を選び，参与観察の他に，その教室に出席している何人かの移民に英語でインタビューをした。そして8回分のフィールドノートを100ページ以上書いた。

上級質的研究法Ⅱでは，質的研究法を使って調査して，そのデータを分析した学術書を毎週1冊あらかじめ読んでおいて，授業ではそれらの本の研究方法論や内容について，他の大学院生たちとディスカッションをした。これら3つの授業を受講したことにより，質的研究法はとても面白い研究法であると，徐々に理解できるようになった。

質的研究法とは何か。一般的に質的研究法は量的研究法とは違い，数値化できない現象を研究の対象とする。数値化できないということは，統計やアンケートの集計で明らかになる数値化されたデータを質的研究法では使わない。ではどのようなものをデータとして扱い，分析の対象とするのか。参与観察で得られたフィールドノート，インタビューを行い，その音声を文字化したインタビューのトランスクリプト，そして研究対象と何らかのつながりがある文書をデータとして扱う。そしてそれら3種類に分類されるデータを作成，もしくは入手して，それらを分析する。

この質的研究法は，20世紀前半に文化人類学者のブロニスワ・カスペル・マリノフスキ（Bronislaw Kasper Malinowski）がパプア・ニューギニアにあるニューギニア島東沖のトロブリアンド諸島に長期にわたって，現地の人と共に生活をして，その生活ぶりを詳細に記録して研究したことから始まったといわれている。その後，アメリカでは，文化人類学者のマーガレット・ミード（Margaret Mead）が，コロンビア大学大学院に在籍していたときに，サモアに行き，長期間にわたって思春期の女性たちの行動や言動を記録し，彼らの習慣や文化に基づいた行動様式を明らかにした。

この論文では，ブロニスワ・カスペル・マリノフスキが書いた『西太平洋の航海者たち』（*Argonauts of the Western Pacific*）と，マーガレット・ミードが書いた『サモアの思春期』（*Coming of Age in Samoa*）という，質的研究法を使い，異文化の社会を分析した 2 冊の古典的な研究書からどんなことが質的研究法にとって重要なのかを明らかにする。

2．ブロニスワ・カスペル・マリノフスキ

ブロニスワ・カスペル・マリノフスキはポーランド出身で，ロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（London School of Economics）で学んだ後，パプア・ニューギニアに近いトロブリアン諸島に住み，現地調査を行った。主な調査目的は，西欧の人々が思っているほど，パプア・ニューギニア周辺の島民は，未開ではなく，洗練された文化や社会構造が存在することを証明したかったようである。彼は文化人類学者で，島に長い間滞在し，どのような文化が未開の地といわれるところに存在しているのかを明らかにしようとした。さらにマリノフスキはどのように分析するデータを収集したのか，その方法論について明確に示した文化人類学者でもある（Bogdan & Biklen, 8）

トロブリアン諸島で調査中，ヨーロッパで第一次大戦が始まり，マリノフスキは，戦争のせいでヨーロッパに帰ることが出来ず，戦争が終結する1918年までの約 2 年間にわたり，島に滞在することとなった。この世界情勢が，偶然にも彼の現地調査に十分な時間を与えることになり，トロブリアン諸島に住む人々の社会や文化を詳細にわたり解き明かすこととなった。

『西太平洋の航海者たち』の序論（Introduction）に，調査の対象，方法，及び範囲（The subject, method, and scope of this inquiry）と題して，調査方法が詳しく書いてある。彼が調査方法として取ったのは，調査対象のコミュニティに入り，一緒に生活をして，なるべく原住民の人たちに溶け込み，彼の周りで起こっていることを，そのまま記録することに努めた。要するに，記録者が主体となって，地の文で記録するのではなく，会話文で逐一言ったことを記録するのである。そして，それら記録した文書を，彼は自分の常識や心理学的な洞察力で分析したと記している。

資料収集について，マリノフスキは，興味深いことを指摘している。彼は現地調査を始めたとき，現地の人たちが話す言葉をほとんど理解することが出来なかった（Malinowski, 4）。その当時，現地語をあらかじめ学習するところはなかったであろうし，現地の人たちが英語を理解していたとは言いがたい。そんな環境でマリノフスキが調査を始めたので，収集した資料をそのままの現地語で理解するのは，かなり難しかったのではないかと思う。実際にマリノフスキがとった手段は，集めた資料を現地語から英語へ訳すということだった。もちろ

ん，文化的な背景を知らないと正確な意味がわからない単語や，英語圏では存在しない考え方を示す単語があったに違いない。マリノフスキは，翻訳という困難な作業をして，現地の人々を理解しようとした。しかしながら，マリノフスキが，この翻訳作業に対して下した評価は，研究の資料として役に立たない，というものだった。翻訳をしてしまうと，現地の人たちの本当の心の動きや行動がわからなくなったと，彼は記述している（Malinowski, 4）。

マリノフスキは，現地調査をするに当たり，言葉の壁だけでなく，調査する研究者の人種のアイデンティティについて言及している。彼は白人が住んでいない地域に住み，他に白人がいないところで調査すべきであるとはっきり述べている（Malinowski, 5）。その当時，彼は自分が白人の研究者であり，そのことが現地の人たちの会話や行動に変化をもたらすと気がついていた。現地の人たちにとっても，今まで遭遇したことのない西欧人が地域社会に来たことにより，研究者がいる場では普段とは違う行動をしたりすることがあったに違いない。例えば，日常的な例で言うと，私は日本に滞在しているアメリカからの留学生を薬局に連れて行ったことがあるが，薬局の店員はその留学生にはじめて会ったにも関わらず，アメリカのどこの出身なのか，日本で何をしているのか，矢継ぎ早に英語で質問を投げかけている場面をみたことがある。お客が例えば日本の大学生であれば，そのような質問を薬局の店員はしなかったに違いない。日常生活であまり出会うことがないアイデンティティを持っている人に出会った場合，無意識のうちに身構えてしまったり，またいつもよりも自己開示が積極的になったりすることは，実際によくある。

研究者のアイデンティティが，研究の資料収集に偏りが生じる場合，どのようにしたら良いのか。マリノフスキによれば，自分が透明人間や天から社会を見つめる神のような存在ではなく，１人の白人の研究者であるという自覚を持って，調査を進めるべきであると考えた。そうすれば，どのような視点から，資料が集められたことが明確になり，研究の客観性が増す。またその地域社会にとって，よそ者ではなく，地域社会の一員として，いろいろなイベントやお祭りに参加し，親交を深めれば，段々と白人であることが地域社会に受けいれられ，人種のアイデンティティが，周りの原住民に与える影響は減少すると考えた。(Malinowski, 6)。その地域社会にとけこみ，異人としてではなく，現地の人たちと同じように生活する人になり，その目線でまわりに起こっていることを詳細に記録することが重要である。

研究者として集めた資料を読み込み分析すると，矛盾や資料があまり集まらない研究分野が，あぶり出されてくる。そのような矛盾点や不可解な点が，新しい発見が隠されている(Malinowski, 11)。この考え方は，現代の質的研究法でも，非常に重要である。質的研究法は今では，文化人類学，社会学，看護学，心理学，障がい学，言語学などの研究分野で使われている。私が質的研究法の存在意義として重要だと思うのは，通常社会から注目されるこ

とがなく，社会の辺境に追いやられている人々の声をすくい上げ，その実情を多くの人に知ってもらい，社会をよりよい方向へ持っていくことである。そのようなことに気がつくのは，収集した資料を分析する過程において，どうしてそのような現象が起こるのか，当たり前のこととしてとらえられていることを敢えて疑問視する必要がある。日常生活において，無意識のうちに受け入れてしまっている言動や価値観について，なぜという問いかけをすることにより，物事の本質を暴くのが，質的研究法の真骨頂である（佐藤，148–149）。

私がシラキュース大学大学院で，質的研究法入門を受講したと前に書いたが，その時の担当教員は，ダグラス・ビクレン（Douglass Biklen）教授で，障がい学の専門家であった。別の授業で，大学の教授がどうして大学の教授になったのか，１人30分程度語るという形式の必修科目があり，ダグラス・ビクレン教授は，とても興味深いことを語った。

ダグラス・ビクレン教授はシラキュース大学大学院博士課程を修了し，博士号を取得した。それから障がい学の専門家として，アメリカの社会を変革したいと思っていた。周りを見渡してみると，シラキュース市では教育委員会の意向で，障がいを持った子供たちは，健常の子供たちと同じ学校に行くことができなかった。彼はそのような状況は不平等であり，人の尊厳をないがしろにする政策だと考え，障がいを持つ家庭を一軒一軒まわり，嘆願書の署名を集め，障がいを持つ子供たちが，普通に家の近くの学校に通えるように，裁判を起こして，最終的には障がいを持つ子供でも，健常の子供たちが通う学校へ通学できるようにした。

この話を聞いて，私は大学の教授は，分野によって違ってはいるが，社会の変革を担うことが出来る職業であると感じた。実際に研究の成果として教育委員会の方針が変わったというわけではないが，研究の根底として，ダグラス・ビクレン教授は，子供たちの多様性を認め，包含的な教育，いわゆるインクルーシブ（inclusive）な教育が，子供たちにとってよりよい教育の環境であると考えていた。また障がいに関して，彼は障がいを持っているのは，障がいを持っている人たちではなく，健常者をある意味基準として優遇する社会の全体的な構造が障がいを作り出していると考えていた。変えるべきは人々の障がい者に対しての偏見や差別意識であり，また障がい者に負担をかける社会基盤のあり方である。

マリノフスキの話題から多少それてしまったが，質的研究法は社会的弱者といわれる人々の声を一般の人たちにも聞いてもらう機会を作り出す研究法である。差別に苦しむ人たちの姿を映し出し，彼らの声をより多くの人々に届けるのが，質的研究法の強みであると，私は考える。

3．エスノグラフィ

マリノフスキは質的研究法の一つであるエスノグラフィの基礎を築いた。民族について記載されたものなら，なんでもエスノグラフィと呼ばれるわけではない。将来の研究者として大学院で訓練された文化人類学者，もしくは民俗学者によって書かれた当該民族の生活の全体もしくは一部に関する具体的な記述がエスノグラフィである。エスノグラフィは，人々が住む自然な環境やフィールドにおいて，日常的な活動や社会的な行動を観察したり話をしたりして，データを収集する。またエスノグラフィは，現地で生活する人たちが，自ら住んでいる世界をどう理解しているのかを，長期間にわたり，質問したり観察したりしながら調査する。さらにエスノグラフィは，研究者が実際に現地の人たちが暮らすコミュニティに入り込み，人々と交流しながら調査を進める。その研究者はその経験が外部の人にもわかるように言語化の作業を進める。その過程において，その研究者が今までの経験で得た知識に依拠して疑問を解決するのではなく，現地の人たちが作り上げた言説や習慣，文化などからくみ取れる事項を丁寧に分析することによって，新たなる考え方や理論的な概念を作り出す。

優れたエスノグラフィは，後から他の研究者が読んでも，正確に何が記載されているのかがよくわかり，そこからある程度抽象化された概念や考え方が導き出されるくらい，細かいところまで記述されたフィールドノートから始まるといわれる（ゴッフマン，29）。調査対象となる人々の発話や行動がよく理解できるように，行動そのものだけではなく，時間的な，また空間的な文脈を含めて記述されている必要がある。

今日におけるエスノグラフィは，固有の文化を対象とする研究から政治介入まで，広い範囲の研究を含むようになった。また直接的に観察をするだけでなく，直接自らが体験していないが，メモや研究過程を示した書類など歴史的な産物を通した研究も存在する。また写真やスケッチなどの映像資料や旅行記，さらにはメディア技術の発展により可能になったフィルムなどによる映像記録なども，エスノグラフィの資料として含まれる。

エスノグラフィの特徴はいくつかある。直接的に自らの目で出来事，行動，規範，価値観など，観察を通して，ある地域の文化や社会基盤を理解しようとする。また研究対象の人々の視点を通して，彼らが出来事，行動，規範，価値観などをどのように理解しているのかを明らかにする。それには研究者による詳細な記述が必要である。普通に周りのことを詳細に観察しながら研究対象となる文化の中に参加するという行為が，ある特定の文脈で何が起こっているのかを理解し，現実に起こっている事象の多面性を知る手がかりを提供する一助となる。社会の文脈とは，資料を収集して記録するときに，より広い文化的，歴史的な背景にも注意を向けると，多少なりとも浮き上がってくる文化的な背景である。エスノグラフィにおいて，研究者が社会的現象をその研究対象者からの目を通じて見ることができれば，研

究対象への早期の，不適切な可能性のある考えを押しつけることにたいして慎重になれる。つまり，研究対象となる人たちの視点にそぐわないような結果になるかもしれない概念や理論を当てはめるのを避けることができる。

先にも述べたように，エスノグラフィはマリノフスキの研究のように，西欧諸国で教育を受けた研究者が発展途上の国の文化や部族を研究するところから始まった。そして1920年代において，原始的な思想を持つネイティブという発想は，英国植民地支配者にとって，すでに当たり前の考え方になっていた。植民地を治める支配者らは行政官を雇って，植民地の先住民について報告するように命じていた。この点からいえることは，初期の文化人類学者は，植民地メソドロジーを採用していた可能性がある。文化人類学者や植民地政府の役人も，原住民たちや広い範囲での外国人について，白人中産階級とはかけ離れた存在だという認識を持っていた。一般的にマリノフスキら文化人類学者たちによって研究された外国の文化は，第三世界の民族集団や西欧世界や学問機関から遠く離れたものであることが明らかにされ，文化人類学者は長い間，文化的立場は相対的であると認識してきたものの，彼らは古典的科学に基づいて，文明化されているのは西欧人であり白人であるという考え方を，意識的，もしくは無意識的に持っていた。このような研究者たちの態度は，ジェンダー，年齢，研究方法や経験といった点で多様化されるまで，問われることはなかった。

4．マーガレット・ミード

質的研究法の基礎を考える上で，もう一人重要な役割を担う研究者がいる。アメリカの文化人類学者であるマーガレット・ミード（Margaret Mead）がその人だ。彼女はコロンビア大学で博士号を取得した文化人類学者である。彼女は博士号取得前に，サモアの思春期の女性や彼女たちが受ける教育について調査して，『サモアの思春期』（*Coming of Age in Samoa*）を1928年に出版した。

では，なぜサモアを研究の場所として選んだのか。それはサモアがアメリカと違い，社会が単純で均一的で，原始的なコミュニティを維持しているので，女性の成長を純粋に観察するのに最適な場所であると考えたからだ（Mead, 7）。アメリカ社会は文明が発達していて，女性の成長に影響を与える要因がいくつかあり，純粋に女性の成長を観察することが出来ない，と彼女は判断した。アメリカの社会は，教育制度，コミュニティが持つ独自の文化，交友関係，多様な人種や階層など，様々な要因が複雑に絡み合っているので，ミードは敢えてサモアという辺境の場所を研究の地として選んだ。

ミードは調査方法について，『サモアの思春期』の付録II（Appendix II）で述べている。まず参与観察を主にサモアの3つの村に住んでいる思春期の女性たちを対象に行った。彼女

たちの出生に関すること，思春期における変化，性体験，結婚などの人生の節目となる出来事を詳細にわたり聞き出して記録した（Mead, 179）。彼女は 9 ヶ月間サモアに滞在して，参与観察を行ったと記している（Mead, 9）。

また，参与観察だけではなく，ミードはインタビューも行った。彼女はサモアの文化や社会について詳しく話してくれそうな女性たちを選び，インタビューをした。また現地の女性から得た情報が正しいかどうか，他の女性たちに確認をした。インタビューを行うときに気をつけなければならないのは，人が喋っていることが必ずしもその人の行動を正確に描写しているわけではないことだ（ゴッフマン，26）。自分が言ったことと自分の行動との間に整合性がないことが，日常生活においてもよくある。言葉はどのようにでも語ることが出来るが，行動は取り繕うことが難しい。

ミードはインタビューを，彼女の母国語である英語ではなく，サモアの現地の言葉で行った。彼女もマリノフスキと同様，翻訳された言葉は研究の資料として役に立たないと判断していた（Mead, 181）。通訳を通してインタビューをすると，現地の人たちの考え方や価値観が英語という言語が持つ文化の枠に強制的にはめられて，現地語が放つ微妙なニュアンスが打ち消されることがある。そのようなことが行われないように，現地の言葉でインタビューのデータを集めるのが最良の方法である，と彼女は考えた。

私が興味深いと思うのは，ミードが現地の言葉でインタビューを行ったことだ。彼女にとって，サモア語の習得が容易だったのかどうかの言及はないが，基本的に調査対象となる人たちの母国語を使って，資料収集を行うべきである。そうすれば，インタビューされる側の人たちが放つ言葉の意味だけでなく，その背後にある文化的な考え方まで探ることができ，より深い分析が出来る。マリノフスキの場合は，当初現地語が理解できなかったようであるが，徐々に現地語を理解できるようになり，なるべく現地語で研究の資料を集めたり，現地の人たちと会話したようだ。

ミードとマリノフスキはどちらも異国の地で調査を行ったが，自分たちのアイデンティティのとらえ方が対照的で興味深い。ミードはサモアで調査をするときに，自分が女性であるということをことあるごとに示し，現地の若い女性たちから，性体験などの普段は他の人にはあまり話さないようなことまで引き出している。これは研究者が女性であることにより，現地の女性たちがある種の安心感を持って，話すことが出来たからだ。ミードはアメリカの大学院の学生で，白人であるという他のアイデンティティを持っているが，どのアイデンティティを前面に出せば，研究に有用な情報が得られるか，熟知しているようだ。それとは対照的に，マリノフスキはなるべく白人であることを際立たせないようにしていた。彼の場合，アイデンティティは白人，男性，ヨーロッパで高等教育を受けた研究者であるが，自分が白人であることが，現地の人々にとってはかなり異質なことで，彼らは彼の前では普段

通りの言動や行動が難しいと感じていたので，彼は積極的に現地の祭りや催しに参加し，白人のアイデンティティが目立たないようにした。そうすることにより，より打ち解けた関係性を現地の人たちと築くことができ，研究に必要な資料を集めることが可能になった。

5．まとめ

マリノフスキとミードによって，エスノグラフィという研究方法がある程度確立された。エスノグラフィでは，研究者は調査地域に溶け込むことが重要である。その地域に溶け込むには，現地で話される言語を理解することが大切だ。そうすることにより，現地の人たちとの友好関係を築くことができ，その地域固有の習慣，慣例，価値観や考え方を引き出すことが出来る。また研究者は自分のアイデンティティが，地域の人たちによってどのように認識されているのかを把握し，資料収集の壁とならないようにしなければならない。マリノフスキは自分が白人であるということが地域に溶け込むのに邪魔になるとの認識を持っていたので，なるべく人々の注意が人種に向かないようにするために，積極的に現地の祭りや催しに参加して，地域社会にとけこもうとした。それとは対照的に，ミードは自分が女性であるというアイデンティティを資料収集の武器とし，思春期の女性たちから男性研究者では聞き出すのが難しかった性体験などを記録することが出来た。このように研究者のアイデンティティがどのように資料収集に影響を与えるのかを自覚する必要がある。

研究者は，時間系列ごとに，なるべく詳細にわたって，フィールドノートを書く必要がある。そのフィールドノートは，研究の大切な資料であり，それを分析することにより，今までの常識を覆すような発見をしたり，当然と思っていた事象の背後にある考え方があぶり出されることがある。そのような新たなる発見が出来るのは，詳細なことまで正確に記録されたフィールドノートがあればこそ可能だ。研究の初期段階では，どこまで細かく記述する必要があるのか，戸惑うことがあるが，自分が頭の中で思い描いている研究テーマとあまり関係なさそうなことでも，書き記しておいた方がよい。質的研究では，よく当初思っていた研究テーマが，現地調査を重ねるうちに，変わってくることがある。その時に以前，あまり研究テーマとは関係がなさそうなことが，実は面白い発見に繋がっていくことがある。そのようなときに備えて，なるべく詳細にわたって，フィールドノートを作成するよう心がけたい。

マリノフスキとミードの研究は，質的研究法の 1 つであるエスノグラフィという研究方法の基礎を作ったといえる。ただ，現代において，彼らのように約 1 年から 2 年間に渡って，ある特定の地域を調査するのは，難しくなってきているのではないかと思う。まず通信技術の発達により，わざわざ現地へ赴いて，少なくとも半年以上にわたって調査しなくても，インターネットを使ってインタビューすることが可能である。もちろん，対面でインタビュー

した方がより様々なことを引き出せるに違いないが，時間とお金を考えると，手軽に現地の情報を得ることが出来る。また研究者自身が，半年から 1 年間，調査対象の地域に住むことが，世界情勢を鑑みると，難しくなりつつある。地球上のいろいろな地域で紛争や戦争が行われていて，安全に海外で調査をすることが段々と困難になってきている。このような時代だからこそ，世界の和平のために相互理解を深めるためにも，エスノグラフィのような研究が必要であるが，時間的，金銭的に 1 人の研究者が海外で調査するのは，正直難しくなってきている。

引用文献

Bogdan, Robert C. & Biklen, Sari Knopp. *Qualitative Research for Education*. Boston, MA: Pearson Education Groupe, Inc. 2003.

ゴッフマン，アーヴィング．フィールドワークについて．串田秀也（訳）フィールドワークの経験．好井裕明，桜井厚（編集）．東京：せりか書房．2000: 16–26.

Malinowski, Kasper Bronislaw. *Argonauts of the Western Pacific*. New York: Routledge & Kegan Paul Ltd. 1922.

Mead, Margaret. *Coming of Age in Samoa.* New York: William and Marrow Company. 1928.

佐藤郁哉．フィールドワーク――書を持って町へ出よう．東京：新曜社．1992.